

春期海外語学研修報告

著者	臼山 利信, 二ノ宮 崇司
雑誌名	外国語教育論集
巻	42
ページ	98-99
発行年	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00159899

春期海外語学研修報告

2018年度カザフスタン春期ロシア語研修について

白山利信 (CEGLOC)

二ノ宮崇司 (筑波大学アルマトイオフィス)

中央アジアのカザフスタン共和国でのロシア語研修(「海外語学研修ロシア語C」)は、今年度で5回目を迎えた。本科目はCEGLOC開設科目であるが、初回～3回目までは、地域研究イノベーション学位プログラム(ASIP)が主たる運営を担ってきた。今回は大学の世界展開力強化事業(ロシア)「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」(Ge-NIS)の実務上の支援を受けた。その意味で、全学的なグローバル人材育成プログラムとも連動した科目となっている。

カザフスタン共和国は1991年にソヴィエト連邦から独立した後、基幹民族で人口の過半数を占めるカザフ人の民族語であるカザフ語を国家語としている。また同国ではロシア語も公用語で、日常生活からビジネス、教育や学術の言語として広く普及している。

今回の研修は、本学の協定大学であるアルファラビ・カザフ国立大学を受入先機関として、ロシア語およびカザフ語の習得と異文化理解を目的として実施した。同大学構内には本学のアルマトイオフィスが設置されており、二ノ宮崇司(アルファラビ・カザフ国立大学日本語招聘教授)が同オフィスのコーディネーターを務めている。本研修も、二ノ宮が所属するアルファラビ・カザフ国立大学東洋学部の全面的な支援を受けて実現した。同学部の関係者に記して感謝申し上げたい。

研修には本学学生13名が参加した。いずれもロシア語履修経験者であり、ロシア語運用能力の向上を第一目的として参加した。ロシア語以外にも、テュルク系世界の文化や自然環境への興味、生物学的な興味も持ち、研修に参加した者もいた。

2018年度のロシア語研修には、筑波大学だけでなく、東京外国語大学でロシア語を勉強している学生も参加した。研修の中心はアルファラビ・カザフ国立大学の準備学部でのロシア語学習である。準備学部における各科目の時間配分(一週間分)は次の通りである。

- ・ロシア語文法 11 コマ
- ・マスコミのロシア語 4 コマ
- ・カザフの歴史と文化 2 コマ
- ・国際理解のためのロシア語 2 コマ
- ・カザフ語入門 2 コマ

準備学部でのロシア語研修以外に、アルマトイオフィスが日本人研修生のため

にカザフスタン全般に関する授業を提供した。カザフスタンの環境問題を Yerlan Akhapov 准教授が担当し、カザフ語の言語的特徴を二ノ宮崇司が担当した。また Borankulova Samal 上級講師がカザフの伝統文化という授業として、カザフスタン国立中央博物館に研修生を案内した。これらは任意の授業である。さらにエクスカーションとして、世界遺産の Tamgaly 岩絵群、カザフスタン最大の渓谷であるチャリンキャニオンを訪れる機会を設けた。それ以外に、研修生たちはカザフスタンの日系企業訪問として Tokyo Rope Almaty の工場を見学した。所長の武山俊夫氏に会社の事業内容、工場での作業工程について説明いただいた。

研修のまとめとして、国際学生フォーラムを開催した。2018年度のテーマは「Методы заработка туризмом」（ツーリズムを仕事にする方法）であった。これは研修生のグループがロシア語で発表し、一方、カザフ国立大学で日本語を勉強する現地人グループが日本語で発表するという場である。日本からの研修生グループには日本の歴史遺産、自然観光、食文化の説明に加え、ガイドやツアーコンダクターといった旅行関係者の役割について発表してもらった。

また、本研修では、筑波大学海外留学支援事業（はばたけ！筑大生）により10万円の渡航費支援を受けた。

研修を終えて、参加学生は「さらにロシア語を勉強したい」、「留学をしたい」、「他のロシア語圏諸国へも行ってみたい」など、語学や海外留学に対するモチベーションが格段に高まったようである。実際に本研修参加者13名のうち、ロシアへ1名、カザフスタンへ1名、交換留学がすでに決まっている。今後もカザフスタンでの語学研修を継続し、こうした意欲ある学生を多く生み出していきたい。



研修中に行われた第5回国際学生フォーラムの様子



研修に参加した筑波大学の学生